

研究報告

松之山における山小屋の建設作業と民俗

富塚茂和¹⁾・佐藤一善²⁾

¹⁾ 十日町市立里山科学館 越後松之山「森の学校」キョロロ,

²⁾ 新潟県十日町市松之山

(2019年2月17日受付; 2019年3月14日受理)

A building method and related folkloristics for traditional thatched hut 'Yamagoya' in Matsunoyama

Shigekazu TOMIZUKA, Kazuyoshi SATO

¹⁾ Echigo-Matsunoyama Museum of Natural Science 'Kyororo',

²⁾ Matsunoyama, Tokamachi, Niigata

はじめに

「山小屋」は十日町市松之山地域の棚田に建設されていた簡易的な萱葺の小屋の名称で、集落から離れた山間地の斜面に拓かれた棚田における休憩または農繁期の宿泊に利用されていた。山小屋と呼ばれる萱葺の小屋は松之山地域以外にも十日町市の田麦、浅野平、鉢でも見られた。これらの地域の山小屋は主に曲がったスギの枝を利用した丸小屋で、冬期には解体されることが多かった（池田1995）。一方で、松之山地域で利用されていた山小屋は冬期にも解体されず、積雪の荷重にも耐えられる構造をしており、豪雪地である松之山地域特有の建設物であったといえる。

十日町市が含まれる頸城丘陵は300ha以上の棚田を有する市町村が連続して10以上存在する、全国的にも稀な地域であり（中島1996）、棚田は十日町市を特徴付ける景観の一つであるといえる。山小屋はかつての棚田の景観を構成する要素の一つであったが、現在の十日町市内には山小屋は残されておらず、その利用や建設に関する記録は非常に少ない。「森の学校」キョロロでは地域の民俗の保全を目的として、2005年5月に施設構内に松之山地域で利用されていた山小屋を復元した。建設から10年以上経過し、天候等の影響により復元した山小屋の劣化が進行してきたため、2017年5月に古い山小屋を解体し、地域住民と協力の下で再建設を行った。本稿では松之山地域中立山集落出身の著者（佐藤一善）の私信および地域住民への聞き取り調査からまとめた、松之山地域における山小屋の実態と山小屋の建設作業の詳細および関連する民俗について報告する。なお本報告における山小屋とその関連民俗の記載は著者（佐藤一善）および聞き取りを行った地域住民からの口述に由来し、1950年代以降に限定された情報となっている。

山小屋の構造

図1は松之山地域で実際に使用されていた山小屋、図2は山小屋再建設の工程である。松之山地域の山小屋には壁は無く、冬期の雪圧に耐えられるように根曲がりを生じたスギ等の木の幹を柱として、

それらを円錐形に組んだ骨組みにススキを地面から葺き上げて建設されていた(図 1ab, 図 2abc). 柱にスギが利用されるようになったのは第二次世界大戦後の拡大造林期を経てスギの売買価格が低下してからであり, それ以前はウリハダカエデやコナラといった雑木を利用していた. ただし, ブナは腐朽に弱いため利用されなかったようである. 小屋の基礎に礎石等はいれられず, 柱を地面に直接埋める掘っ建て小屋であった(図 2a). 山小屋の萱葺は萱の根元側が外側あるいは下方になるように葺き, 一定の間隔で段差をつけることが多かった(図 1a, 図 2bd). この葺き方は松之山地域では「ニューガサブキ」と呼ばれ, 家屋の萱葺屋根で頻繁に用いられる, 段差をつけない葺き方は「ホンブキ」と呼ばれて区別されていた. ニュウガサブキはホンブキと比較すると必要な萱の量が少ないという利点があり, 家屋でも葺き替えの際に用意した萱が少ない場合に利用されることもあった. 一方で耐久性の面では劣っており, ニュウガサブキでは 10 年で葺き替えが必要なのに対し, ホンブキでは



図 1. 松之山で利用されていた山小屋. 通常の入入口 (a) に張り出し構造がつけられることもあった (b). 写真は小口成一氏撮影. 撮影日, 撮影場所は不明.

丁寧に管理すれば 60 年は葺き替えずに利用できるとされていた. 山小屋の下段の萱葺は壁としての役割も果たすため, 風雨を防ぐ 2 層構造にしていた. 内層の萱には葺き替えの際にでた古萱を再利用していたようである. 山小屋の頂点は漏水が生じないように強く巻き締めて仕上げを行っていた(図 1b, 図 2c). 萱は内外から横木によって圧迫されて固定され, これらはそれぞれ家屋の萱葺屋根における屋中とぬいぼくに相当し(安藤 2017), 山小屋では双方が一括して「ナル」と呼ばれた. ナルには良くしなり, 丈夫なりョウブやマルバマンサクが用いられてきた(図 1a, 図 2a). ヤマウルシも良くしなり, かつ腐朽に耐性があるためナルに利用されることもあったが, 必要な太さのヤマウルシを確保することが難しいため利用される機会は少なかったようである. 柱同士やナル同士, ナルと柱の結びつけ, 山小屋の頂点の締め上げには荒縄やフジ等のツル植物, 細いマルバマンサク等が利用されていた. 山小屋の床には筵が敷かれ, 防寒対策にその下に藁が敷かれることもあった(小口八重子氏; 福原正子氏; 保坂政一氏, 私信). 入り口部分を冬期に解体可能な張り出し構造にした山小屋が作られることもあり(図 1b), 張り出し部分は雨具等を脱ぎ着する場所として利用されていたようである.

山小屋は各農家が所有する棚田ごとに水捌けの良い場所が選ばれて建設されていた. 松之山地域では農閑期中に新しい圃場を拓く, 「田ほり」が行われることがあった. この際に出た石等を積み上げて山小屋建設の土台とすることもあった. 冬期間中は山小屋を利用することはなく, その入り口を萱で覆って内部に雪が入らないようにしていた.

以上が松之山地域の代表的な山小屋の構造であるが, 稀に円錐形でない山小屋が建設されることもあったようである. 松之山地域の豊田集落には棟木を持ち上げてサス組みし, 地面から萱を葺き上げ



図 2. 山小屋再建設の工程. 骨組み (a). 萱葺き (b). 頂点の仕上げ (c). 完成した山小屋 (d). a は小林誠博士, b, c は村山暁氏, d は著者 (富塚) 撮影.

た三角小屋状の山小屋も建設されていた (保坂政一氏, 私信).

山小屋の材料の収集

山小屋の柱には雪圧に耐えられるように幹が全体的に緩く曲がり、根元で強く湾曲している木が適しているとされている. 伝統的には 3~4 月に柱となる木を切り出し、雪を利用して橇で運び出していた. 今回の再建設では十日町市松之山松口の須山 (キョロロの森) 内のスギ林から、幹の直径が約 25 cm のスギを 18 本選定し 2017 年 4 月に伐採した. 伐採したスギはクレーン付きのトラックで運び出し、高水圧ポンプを利用して樹皮を剥き、腐朽を抑制するために根元から 50~70 cm をトーチランプで炙って炭化させた.

ナルにはリョウブ等の根元から最初の枝分かれまでの部分を利用し、その部分が長く緩やかにカーブしている木が適当であるとされている. 伝統的にナルは晩秋に伐採していた. 晩秋に伐採したナルは含水量が少ないため乾燥による体積の減少が小さく、萱の脱落や、骨組が崩落する危険性が少ないとされている. 今回の再建設ではリョウブだけをナルに用い、内側のナルに利用する場合は直径約 6 cm, 外側のナルに利用する場合は直径約 3 cm を目安として 2017 年 4~5 月に約 200 本のリョウブを十日町市松之山松口の須山 (キョロロの森) から伐採した.

松之山地域における萱はススキまたはヨシを指す. 家屋の萱葺きにはその両方が用いられてきたが、山小屋にはススキだけが用いられていたようである. 松之山地域では集落内に共有の萱場があり、集

落共同で管理していた。萱場の管理は松之山地域では萱場の「ショウヤク」と呼ばれ、萱場内の植物を刈り取り、それらを萱場から取り除いていた。管理された萱場で育成した萱は硬く、漏水の原因となる萱以外の植物の混入が少ない。こうした萱は松之山地域では「カブツガヤ」と呼ばれ、萱葺に最適であるとされていた。採集後に腐朽しやすい葉の部分を取り除いた萱は「ハネソ」と呼ばれ、主に家屋の萱葺に用いられていた。しかしながら山小屋の萱葺は家屋の萱葺と比較すると薄く、ハネソを利用すると漏水が生じやすいため、山小屋ではハネソを用いずに主に葉を残した萱が使われていた。萱の採集は伝統的には晩秋に行われていた。山小屋に必要な萱の量は家屋の萱葺屋根と比較すると少ないため萱は農家ごとに採集していた。松之山地域には萱



図3. カヤツボ。再建設する予定の山小屋の近傍に保管した。写真は村山暁氏撮影。

頼母子講による萱の相互扶助も行われていたが（久保田 1991b）、山小屋の萱葺で頼母子講が行われる機会は少なかったようである。刈り取った萱は円錐形に萱を堆積した「カヤツボ」で保管していた（図3）。今回の再建設で利用した萱は、地域住民から提供された軽トラック3台分の萱とキョロロのスタッフが2016年の秋に新潟県津南町の萱場から刈り取ったススキを利用した。前者の萱にはススキとヨシが含まれ、葉が取り除かれて乾燥済みであったため屋内で保管した。後者の萱はカヤツボの状態ですぎ林内で保管し、2017年の5月にカヤツボを解き、再建設作業に先立ってスギ林内で乾燥させた。

山小屋の組み立て

山小屋の建設は伝統的には田植えが終わった6月に行われることが多かった。建設の際には萱葺に熟練した職人が建設全体の指揮を執っていた。今回の山小屋の再建設は2017年5月11日に開始し、同年5月19日に完成した。今回の山小屋再建設の工程を表1に示す。

古い山小屋は萱とナルをすべて取り外した後、再利用可能な柱はそのまま残し、腐朽の進んだ柱だけを交換した。地面に約30cmの穴を掘り、そこにスギの柱を入れて固定した。円錐の頂点と古い山小屋の地炉が同一鉛直線上になるように曲がりや太さの異なるスギ同士の間隔や柱の角度、組み方を調整して組み立てた。柱は再利用した柱も含めて合計で18本立て、柱同士は頂点で針金を使って結びつけた（図2a）。屋中に相当する内側のナルは荒縄を利用して柱に結びつけた。ナル同士は針金で結びつけながら継

表1. 組み立て作業の日程

日程	工程
1日目	古い山小屋の解体、柱の組み立て
2日目	柱の組み立て、萱葺（1段目）
3日目	ナルの採集
4日目	萱葺（1段目）
5日目	萱葺（2段目）
6日目	休日
7日目	萱葺（2, 3段目）
8日目	萱葺（3, 4段目）
9日目	萱葺（4, 5段目）、仕上げ

ぎ足して山小屋を一周させ、合計で10段のナルを組んだ(図2a)。

萱をナルに固定する作業は松之山地域では「針とり」と呼ばれた。針とりは先端付近に穴が開いた巨大な針のような専用の道具を使用し、山小屋内外の作業員が協力して行っていた(図4a)。今回の再建設で地域住民から提供されたハネソは下段の萱葺の内層に利用し、キョロロのスタッフが採集した葉のついた萱を外層に使用して両者を補完した。2段目以降の高所の萱を葺く際は短く切った雑木を荒縄でナルに懸けて組んだ「あしろ木」を足場としていた(図4bc)。萱葺の段数は山小屋の大きさや材料として用意した萱の長さによって調整される。今回の再建設では全体で5段になるように萱を葺いた(図2d)。山小屋の頂点は内側の柱を箆で覆い(図2b)、その上から萱を葺いて、萱を荒縄と針金で強く結び付けた(図2c)。萱葺の縁が揃っていないと漏水と耐久性の低下の原因となるため、2段目以降の萱は固定する前に萱の根元から木槌で叩いて萱の下端を揃えとともに(図4b)、固定後に刈り込みを行った。



図4. 山小屋の萱葺。針とり(a)。仮固定した萱を木槌で叩いて揃える(b)。ナルとあしろ木(c)。a, cは小林誠博士, bは村山暁氏撮影。

山小屋の利用

山小屋の大きさや内部の設備、利用方法は山小屋を所有する農家と棚田との距離によって異なっていたようである。集落から遠い山間地に拓かれた棚田を所有する農家の多い、松之山地域の中立山集落では大型の山小屋が多く建設されていた。それらの内部には地面を掘った簡易的な囲炉裏(地炉)が造られ(図5)、山小屋の頂点から自在鉤が垂下されて山小屋内で炊事と暖がとれるようになっていた。内部は5~6人が宿泊できる程度の床面積が確保されていたことが多かった。



図5. 山小屋の地炉。写真は小林誠博士撮影。

こうした山小屋を所有する住民は山小屋を休憩や炊事、農繁期の宿泊に利用していた。山小屋には農具や食料、寝具、その他の生活必需品が保管され、数日間は山小屋で宿泊できるようになっていた。宿泊の期間は山小屋と集落との距離によって異なっていたようである。集落から離れた棚田に山小屋を所有する農家の場合は積雪が融けて耕作が可能になる早春から田植えまで期間中、農家の主たる労働者が山小屋を宿泊に利用し、集落に戻るのは食料等の補給の際だけとなることもあった(保坂政一氏、私信)。また、山小屋は農閑期の田ほりの際にも宿泊に利用されていたようである。

集落周辺の緩斜面に棚田が拓かれていた松之山集落では山小屋が建設されることが少なかった。大きさも中立山集落の山小屋と比較すると小型で、内部に 2～3 人が座れる床面積が確保されている程度であった。内部には地炉が造られず、山小屋は主に休憩や農具の保管に利用され、農繁期であっても山小屋に宿泊することはなかったようである（小口成一氏、私信）。

中尾集落の棚田に建設されていた山小屋は松之山集落の山小屋よりも大型で、山小屋の内部には地炉が造られていたが自在鉤は設置されていなかった。山小屋内で炊事や宿泊をすることは少なく、山小屋は主に農具の保管や休憩、暖をとるために利用されていたようである（小口八重子氏、私信）。

山小屋は上記の 3 集落以外にも赤倉、天水越、天水島、五十子平、上之山、上湯、上鰯池、北浦田、坪野、田麦立、豊田、月池、西之前、東山、湯之島等の集落に建てられていたようである（小口八重子氏；福原正子氏；保坂政一、私信）。記録が残っていないものの松之山地域内の各集落に建てられていたことが予想される。こうした山小屋は 1960 年代以降、松之山地域内で農家に乗用型トラクターが普及し、それに乗って棚田まで行き来する農家が増えると共に減少していったとされている（保坂政一氏、私信）。1960 年代末までは天水越集落に山小屋が残っていたことが聞き取り調査から分かっているが（福原正子氏、私信）、詳細な時期については判明しなかった。松之山地域では 1957 年から 1976 年にかけて住民の所有する車両数が増加しており、特に乗用トラクターを含む小型特殊車両の普及が著しい（久保田 1991a）。松之山地域の山小屋はこの期間中に姿を消したのだと考えられる。

松之山地域の山小屋の民俗学的重要性

松之山地域の山小屋は十日町市内の他の地域で見られた山小屋と構造が異なり、集落と耕作地が離れた里山であると同時に豪雪地でもある地域特有の建設物であると考えられる。山小屋はその利用方法から、集落と耕作地が離れた山村や離島に見られる出作り小屋に相当すると考えられる（田中館・山口 1936; 浮田 1974）。特に豪雪地である石川県白山連峰の出作り小屋と松之山の山小屋の間には類似点が認められる。白山連峰には放射状に組んだ柱をサスとして地面から萱を葺いた「ネブキゴヤ」と呼ばれる出作り小屋が建設されていた。同地域には円錐形に柱を組んだ背の高い萱葺小屋である「ズマルキゴヤ」も建てられ、そこで蚕糞を貯蓄していた事も報告されている（島村 1987）。また、石川県小松市の旧新丸村に建てられていた「ネブキゴヤ」又は「ヤマメゴヤ」と呼ばれる小屋の柱には雪圧に耐えられるように根曲がりしたミズキ等が用いられていた（千葉 1990）。白山連峰や旧新丸村のネブキゴヤは松之山地域の山小屋と比較するとより大型で棟木があり、居住のための内部設備が充実しているという違いがあるものの、萱の葺き方や根曲がり材の利用方法で類似点が見られる。ズマルキゴヤは宿泊や居住には利用されていないものの、その構造は松之山地域の山小屋とよく類似している。互いに離れた豪雪地の里山で類似した小屋が建設されていたことは大変興味深い。松之山地域の山小屋は失われつつある日本海側中山間地の里山の文化を保全する上で重要な建設物であると考えられる。

おわりに

山小屋のある棚田は1960年代以前の松之山地域ではありふれた風景であったと考えられるが、現在の松之山地域には農作業の一部として利用されている山小屋は残されていない。これは自動車や乗用トラクターの普及等の生活様式の変化が原因だと予想される。また、かつて松之山地域の棚田に山小屋があったこと知る地域住民も少なくなっている。今回の事業で再建設した山小屋はキョロロ施設内での展示を目的としており、完成した山小屋やその建設方法は伝統的な山小屋と完全に同一ではない。しかしながら、記録の少ない山小屋を保全し、関連する民俗を来館者に発信する上で、再建設した山小屋は有用なツールになり得る。今後は再建設した山小屋を展示やイベントに活用することを期待する。

謝辞

山小屋を再建設するにあたり、材料の確保および建設作業には多くの地域住民の方々とキョロロのスタッフにご協力を頂いた。松之山集落の小口成一氏、中尾集落出身の小口八重子氏、天水越集落出身の福原正子氏、豊田集落の保坂政一氏からは松之山地域で利用されていた山小屋の写真や山小屋の利用方法についての貴重な情報を頂いた。また、本稿をまとめるにあたって「森の学校」キョロロ館長村山暁氏と「森の学校」キョロロ学芸員小林誠博士からは記録資料となる写真を提供して頂いた。この場を借りて諸氏に心より感謝の意を表す。

引用文献

- 安藤邦廣（2017）新版萱葺の民俗学－生活技術としての民家。はる書房，東京。
- 池田亨（1995）農耕生活，pp397-400。十日町市史編さん委員会（編），十日町市史。十日町市役所，十日町。
- 浮田典良（1974）八重山諸島における遠距離通耕。地理学評論 47（8）：511-524。
- 久保田好朗（1991a）交通と通信，pp696-720。松之山町史編さん委員会（編），松之山町史。松之山町，松之山。
- 久保田好朗（1991b）ムラの仕組みと衣食住，pp981-1006。松之山町史編さん委員会（編），松之山町史。松之山町，松之山。
- 島村昇（1987）白山・山村住居の古代的性格：住空間の史的展開過程に関する研究（その1）。生活科学論叢 19：1-46。
- 田中館秀三・山口彌一郎（1936）東北地方に於ける出作及び出稼聚落の経済地理 福島縣南會津郡檜枝岐村の出作 岩手縣二戸郡田山村の出稼。地理学評論 12（3）：218-247。
- 千葉徳爾（1990）白山麓民家の構造材の樹種と用法。石川県白山自然保護センター研究報告 17：47-60。
- 中島峰広（1996）棚田の保全。地学雑誌 105（5）：547-568。